特集

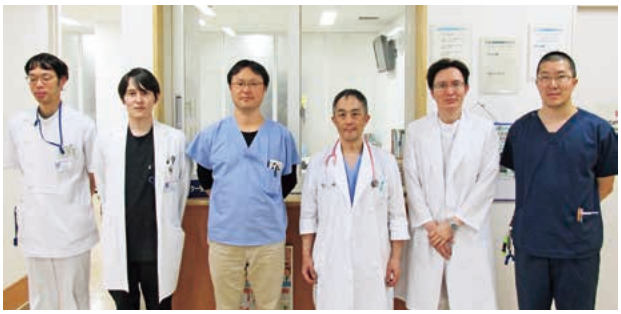
消化器内科

～体に負担のない内視鏡治療を積極的に行っています。～

■消化器内科医長　万波　智彦

消化器内科では、消化管（食道・胃・十二指腸・小腸・大腸）や肝胆膵領域（肝臓・胆嚢・胆管・膵臓）を中心に、すべての消化器疾患に対して診断、治療を行っております。日々進化する知識、技術を取り入れながら、的確な画像診断、最新の治療を提供しています。また、シームレスな医療をモットーに、外科との定期的なカンファレンスを通して患者さんに最も適した治療方法を選択することを心がけています。

スタッフは4名、レジデントが2名の体制をとっています。今年の4月から新たに後期研修医として佐柿先生、永原先生が仲間に加わり、より活気あるチームになっています。それでは、当科の活動内容を混じながら消化器内科の現状を紹介させていただきます。



坂林雄飛　須藤和樹　古立真一　万波智彦　福本康史　若槻俊之

上下部消化管部門

Narrow Band Imaging（NBI）、**拡大内視鏡**の導入によりリンパ節転移の可能性がほとんどないと考えられる早期病変の発見が増え、**内視鏡的粘膜下層剥離術**（ESD）による低侵襲な治療を行う機会が増えてきています。当科でも早期食道癌、胃癌、大腸癌に対してESDを行っており、件数も徐々に増加し、昨年は年間100件を越えました。また**腹腔鏡・内視鏡合同手術**（Laparoscopy and Endoscopy Cooperative Surgery：LECS）の件数も年々増加傾向にあり、より当科の治療域が広がってきております。また、治療はもちろんのこと、内視鏡診断にも力を注いでおり、週1回の生検カンファレンスや月1回行う院外の先生を交えたESDカンファレンス等で研鑽を積んでいます。

小腸については、以前は暗黒大陸とも言われ、内視鏡での観察が不能とされる臓器でした。しかし、近年**ダブルバルーン内視鏡、カプセル内視鏡**の開発により、全小腸の観察が可能となっています。小腸癌、悪性リンパ腫、GIST等を認めた場合に生検診断を行うことや、小腸潰瘍、angioectasis等からの出血に対してダブルバルーン内視鏡で止血術を行うこともあります。最近は抗凝固薬、抗血小板薬を内服される患者様が増加するにつれて、小腸の粘膜障害から出血を来す患者様も増える傾向にあります。

肝臓部門

長年、不治の病であった、B型、C型肝炎は、劇的に治療が進化しています。B型肝炎は、内服薬でウイルスを押さえることができ、C型肝炎は、内服薬でウイルスを駆除できるようになっています。当院でも多くの患者さんに治療を導入し、肝機能が安定し、肝硬変、肝癌への進行を抑えています。

ウイルス性肝炎は、本人が自覚無く感染していることが多く、放置されていることは問題になっています。当院は、厚生労働省の方針である肝炎診療体制の整備拡充促進のため、**岡山県肝疾患二次専門医療機関に認定**されており、医療従事者向けの研修会や、患者に向けて健康教室などを行い、肝疾患の正しい知識を発信し、普及啓発しています。

胆膵部門

胆管結石症に対して内視鏡を用いた**結石除去術**や、悪性腫瘍に伴う閉塞性黄疸に対して**ステント留置術**などを行っております。胆膵疾患は、感染を伴った場合は致死性となることがあり、治療に緊急を要することも少なくありません。また、CT、MRIでは診断困難な腫瘍性病変に対して、**超音波内視鏡下穿刺吸引法**（Endoscopic Ultrasound-Fine Needle Aspiration：EUS-FNA）を行うことで、より正確な診断が可能となりました。その診断能は76-95%と報告されており、治療法を選択するうえで組織学的診断は非常に重要であると考えられます。

化学療法部門

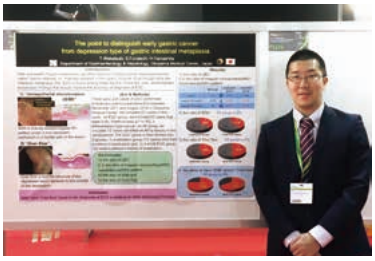
消化器癌に対して行われる抗がん剤治療は、最近話題の免疫療法（PD-1抗体）をはじめ分子標的の薬を含む効果的な薬が次々と開発されることによって大きく変わってきています。近年の傾向としては、化学療法の大半が外来通院しながら行うことが可能となっています。治療中の患者さんにとって大切なことは副作用対策であり、医師だけではなく看護師や薬剤師が積極的に関わって個々の患者さんに適切な副作用対策を行っています。また、多くの臨床試験にも積極的に参加し、新しい薬剤や治療法をいち早く導入できるように心がけています。

研究・情報発信・教育

HERO研究会

日々進歩する医療に対して、常に最新の知見に基づいた医療を提供するため、院内でのカンファレンスはもちろんのこと、他施設も含めた次世代の育成にも力を入れています。2014年に立ち上げた、岡山県内の若手の育成を目的とした研究会(年3回開催)『HERO研究会 -Honest learning of Endoscopic diagnostics, Radiant meeting in Okayama-』はもう6年目となりました。内視鏡診断学、病理診断を主に指導、教育しており、回を重ねる毎に若い先生の技量が向上しているのがよくわかります。また、2018年からは全国規模の研究会『岡山拡大内視鏡研究会』を立ち上げました。症例を全国から集め、コメンテーター、病理医も全国から御高名な先生方に集まっていただき、内視鏡所見と病理所見の対比を中心に拡大内視鏡の限界に迫る研究会です。今年3月に第2回を開催し、岡山県内外からの参加人数は昨年の1.5倍に増え、研究会への関心の高さが伺えます。

2017年より始めたESD live demonstration & Hands on seminarは今年で3回目を迎えます。当院で行われている早期癌に対する最先端の内視鏡診断によるLive Demonstration、また最新の診断手技、そして内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)のコツとポイントを示すいい機会となっています。またHands on seminarではブタの胃袋、大腸を使用して、トレイニーの先生方に実際に手を動かしてもらい指導しています。一人のトレイニーに十分な時間をとっているため、満足度の高い経験を積んで頂けています。



また研究会、学会発表等も数多く行っています。毎年、地方会や日本消化器関連学会(JDDW)等の国内学会はもちろんのこと、Asian Pacific Digestive Week(APDW)、United European Gastroenterology week(UEGW)等の国際学会においても発表を行っております。研修医、レジデントの先生方も積極的に発表を行っており、希望者にはシンポジウムでの発表や、海外発表も行ってもらっています。

臨床試験についても当院主導の多施設共同研究も始まりました。今後も当科の成績、自主臨床研究をもとに、新たな知見を国内外へ発信してまいります。

自己紹介

2018年11月に着任した、万波智彦です。

前任地は広島ですが、2009年まで当院に在籍していましたので、9年ぶりの岡山医療センター勤務です。生まれ育った岡山の医療に再び貢献できることを、嬉しく思います。

これまで最も精力的に行ってきたのは、内視鏡治療です。特に、胃癌や大腸癌などに対する内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)の施行は600件を超えており、地域でもトップクラスの経験数です。一方、内視鏡的逆行性膵胆管造影(ERCP)やその関連治療手技、肝細胞癌に対するラジオ波焼灼療法(RFA)などにも積極的に取り組んでいます。化学療法・癌薬物療法も、力を入れている分野の一つです。

相談しやすい消化器内科、頼りになる消化器内科を目指しています。地域の先生方も、院内他科の先生方も、気軽に声を掛けていただければと存じます。

【資格・所属学会】
医学博士
岡山大学医学部　臨床准教授
日本内科学会　総合内科専門医・指導医
日本消化器病学会　消化器病専門医
日本消化器内視鏡学会　専門医・指導医
日本肝臓学会　肝臓専門医・暫定指導医
日本超音波医学会　超音波専門医・指導医
日本胆道学会　指導医
日本臨床腫瘍学会
日本救急医学会認定　ICLSインストラクター・ディレクター
(ICLS: Immediate Cardiac Life Support)
日本内科学会認定　JMECCインストラクター
(JMECC: Japanese Medical Emergency Care Course)